資料２

現地事例調査結果概要

１　水産業分野【明石浦漁業協同組合】（Ｒ４年３月２日）

（１）生産

○漁の時間制限による資源保全
○海底耕耘やかいぼりによる資源を回復させる取組（栄養塩不足によるノリの色落ち）
○栽培漁業を重視するなど、漁業者も経営者である意識を持つという考え方に共感

（２）労働

○漁業者の後継者問題は収入の確保が重要（養殖などに取り組む）
○漁協職員の育成も重要
○若い人の姿が多い。組合長の姿を見てついてきているから。

（３）流通・消費

○一般の方に知ってもらう必要があるため動画を作成
○地場に魚を供給できれば、地域の連携や意識醸成はしやすくなる
○地元にファンが多い方が良く、情報発信を積極的にするべき
○サワラのブランド化により魚価が向上

（４）他分野との連携等

○神戸北野ホテルの山口シェフをサスティナビリティアンバサダーに委嘱し、世界に発信（ＳＤＧｓに向けた取組）
○養殖などに取り組むには、知識や他分野との連携は大事
○他産業で不要なものが水産業で活用でき、その逆もあるため、農業、林業など一次産業同士の連携が重要

２　農業分野【JA 兵庫西、（株）アグリ香寺、豊富ほ場整備推進委員会】（Ｒ４年３月３日）

（１）生産

○米を中心とする土地利用型農業を維持していくことが、地域社会や環境、生活を守り、防災にもつながる
○農業インフラの老朽化対策が必要
○地域の農地を地域で守っていきたい
○担い手不足、耕作放棄地の増加防止等を解決するために順次基盤整備を実施
○土地利用型農業中心で、高収益作物も少しずつ拡大
○スマート化を図るため、12 集落の農地全てをデータ化。IPM の導入も行い、病害虫、適地適作、排水対策等を進め、低コスト化、増収等を図っている

（２）労働

○米価が大幅に下落する中、ＪＡが価格補填を実施し再生産可能な所得を確保

○地域内には農業を知らない人が多く、人材の確保、技術の継承等が難しい

○営農指導には、JA の職員や県の普及員の力が欠かせない

○基盤整備後も生産計画や販売計画の実行に向けた支援が必要

○営農組織ができた後のフォローの強化が必要

○法人化の制度説明等資料にまとめる際のノウハウや人材が不足

○地域の外から幅広く人材が確保でき、自ら生産したもの以外にも加工販売できることから将来の事業展開を見据えて株式会社化

○若い人が中心になって将来の自分達のために方向性、どのように経営するかを考えていくことが必要

○株式会社化したが、対象が集落内の人に限定されてしまう。若い人を常時雇えるほどの作業量はない

○集落営農では常雇いが難しいため、若い人を取り込むことが難しい

（３）流通・消費

○環境創造型農業を進め米価の向上を図っているが、阪神地域等に比べて農産物を買い支えていこうという気運が低いため、消費者に PR が必要

○販売先はできるだけ地元の地域（２～３割高く販売可能）

○農産物の価格が低い

○販路を農協が見つけて契約販売を促すことも農協の役割

○何を作れば良いかや売り先の確保は重要な問題

【東播磨フィールドステーション（草刈り作業のサポート）】（Ｒ４年３月３日）

（１）生産

○ため池が地域にもたらす「ため池サービス」を維持・向上させ、地域のレジリエンス（環境・状況の変化に適応し、持続、発展していく力）を高めることを目的に、大学、県民局が連携した地域の研究拠点として設立

○ため池を活用としたビジネスで先進事例を作っていきたい

○地域では、草刈りに不安を抱えている

○草刈りは地域を豊かにする手段であり目的化しないように注意が必要

（２）労働

○モデルやモノへの支援ではなく、人やプロセスへの支援が必要

○一般市民の若い女性が手伝ってくれたことにより、地域の若い女性も手を上げてくれるなど波及効果もあった

○草刈り業者がいなくなっており価格が高騰

○研究者と取組が必要と思う地域の人が参画し意思決定していることが良い

○地域の高齢者の刺激になるなど草刈り以上の価値がある
○地域のコミュニティに入っていく形ができていて、うまく人材育成にもつながっており、非常に可能性を感じる

（３）他分野との連携
○漁業者とともに水資源をどう活用していくか協議していく場が必要
○企業と連携したかいぼりはモデルケースをつくれば普及していく。SDGs にもつながるので、企業にとってもメリット

３　林業
【（株）山崎木材市場】（Ｒ４年３月７日）
（１）生産
○これまで採算が合わないため山に放置されていた間伐材を木質バイオマスとして発電に使用。間伐材の活用により、災害時の流失を防止し災害に強い山づくりに貢献

（２）労働
○若手職員の確保が課題
○木材集積場に屋根がなく、天候の影響を受け労働環境が悪い

（３）流通・消費
○取引先を実績のある会社に限定し、商品や製品を納品した後に代金を受領する方式を採用することで円滑な取り引きを実現
○取扱量が多く細かな規格毎にまとまった量を確保できることから高値で販売
○直接木材を自分の目で確認して購入することで、購入後の苦情やトラブルがない
○木材価格は外的要因によるものが大きく安定しない

【Tenon（合）】（Ｒ４年３月７日）
（１）生産
○地域の里山の間伐などを行い、地域材を確保したい
○林業にも重機や製材する機械のレンタルがあれば多くの方が地元材を活用できる
○木育や間伐による里山整備、機械導入などに森林環境贈与税を活用できるのでは
○イスは曲線が多く、端材が多く出るため炭焼きや薪ストーブに活用
○イスの修理も手がけ、同じものを修理して長く使える循環型社会を目指している
○里山の整備はまだまだすべきところが多く、手が回っていない状況なので、賦存量は十分ある
○レーザー測量等のデータを活用して対象木を探索することもできるのでは

（２）労働

○県内 800 人ほどしかいない林業従事者が増えることにも繋がれば良い

（３）流通・消費

○県産品を扱うアンテナショップ等で販売してもいいのでは

○「ひょうご木製品マイスター」として県で登録。イスの製作・販売を通じて、兵庫の山から木を伐採し使うことの意義を伝え広げていく

○若い世代は完成品しか知らず生産過程はブラックボックス。他とも連携してより効果的な木育を実施していきたい

４　畜産分野【弓削牧場】（Ｒ４年３月 17 日）

（１）生産

○持続可能な酪農を目指しておりふん尿からバイオガスを生成し、エネルギー源として活用

○副産物である消化液を使って、野菜、果樹を栽培、牧場内のレストランで自慢の乳製品とともに提供し、牧場内での資源循環を実践

○生成されたバイオガスは水を温めるボイラー燃料として利用するほか、ハウス内の加温等にも利用

○消化液は販売も行っており、また、「山田錦」を生産する水稲農家が、消化液だけを施肥した有機栽培の山田錦で日本酒を醸造

○たまねぎも皮等の廃棄物が出るので、極力コストをかけずにこれらの廃棄物を利用してバイオマスの生成などエネルギー利用が出来れば

○牛の首輪に IC タグを搭載し、泌乳量に応じた量の濃厚飼料がフィールドステーションで給餌されるため配合飼料の食べ過ぎが減少

○国では大規模化がすすめられているが、国や地域によって抱えられる絶対量があり、無理をすると様々な問題が出てくる

（２）労働

○搾乳ロボットで乳量や前回搾乳時間等を個体管理し大幅な省力が可能

※現地調査の詳細な内容については、別紙「農林水産政策審議会現地調査結果」参照
※今後、総会資料に反映予定